

監修 財団法人 関西盲導犬協会

全国の人々の瞳を  
感動の涙で濡らせた  
あの物語

静かに、いっしょうけんめい生きました……。  
クイールは、ずっとあなたのそばにいます。



# 盲導犬クイールの一生

文・石黒謙吾 / 写真・秋元良平 (文藝春秋刊)

本作品の売上の一部は、「クイール基金」  
(盲導犬の育成と盲導犬訓練士・盲導犬歩行  
指導員の養成のために活用)に使われます。

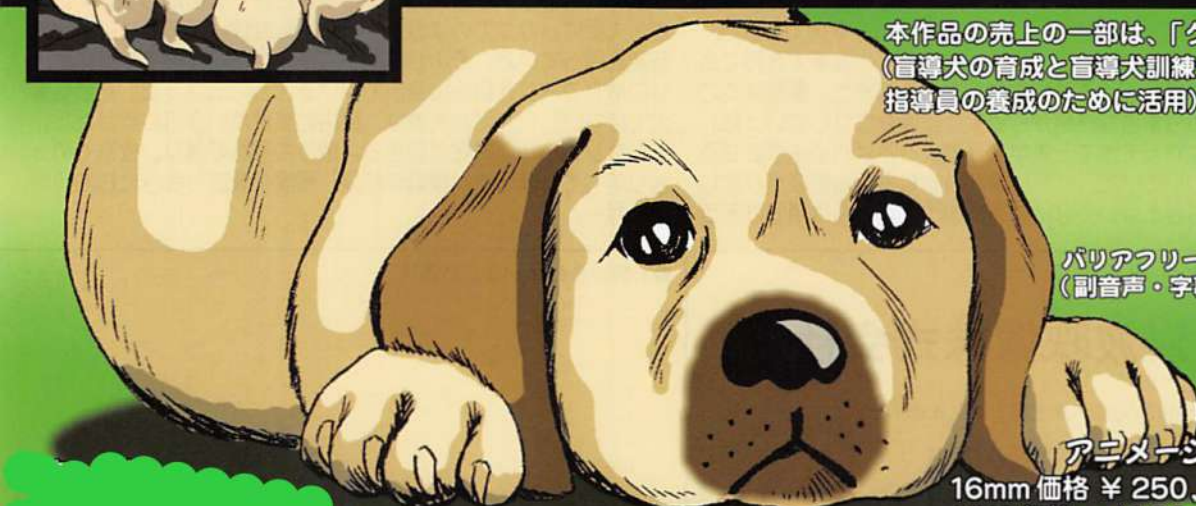
バリアフリー版もあります。  
(副音声・字幕スーパー付)

アニメーション 25分

16mm 価格 ¥ 250,000 (税別)

VHS 価格 ¥ 60,000 (税別)

学校価格 ¥ 30,000 (税別)



# 盲導犬クイールの一生

「人間らしい歩き方を思い出させてくれた」

「盲導犬は、ただ道を教えてくれるだけと思っていましたが、  
でも違いました。いっしょにいただけで気持ちを明るくしてくれる。  
友だちなんですね」

パートナー 渡辺 満

## あらすじ

1998年7月20日この日クイールの呼吸は朝から荒かった。  
心配そうに見守る仁井さん夫妻とファンタ。

1986年6月25日 東京・杉並 水戸レンさんの家の一室で  
5匹の仔犬が生まれた。水戸さんは、1匹のオスの仔犬のわき腹  
に黒いシミのような模様を見つける。ラブラドルでは単色でブ  
チは生まれてこないはずなのに…。模様はカモメが翼を広げて飛  
んでいるようにも見え、『カモメのジョナサン』にちなんでジョ  
ナサンと名付けられた。この犬が後のクイールなのだ。水戸さん  
は、5匹の仔犬の世話に追われる忙しい毎日を送る。水戸さんは、  
5匹のうち1匹でも盲導犬になれないだろうか…。ベテランのブ  
リーダーに適性判断をしてもらう。「この2匹なら、どちらでも  
いいと思う」と言うリーダーに水戸さんは、ジョナサンに決め  
る。わき腹にある黒い十字型の模様に因縁めいたものを感じて  
いたからであった。ジョナサンが、盲導犬になるための第一歩を踏  
みだした瞬間であった。盲導犬は、生涯何度かの別れをしなければ  
ならない。最初の別れは、生後43日目によってきた。パピー  
ウォーカーと呼ばれる《育ての親》の元へ行くのである。

京都に住む仁井勇、三都子さん夫妻は、ジョナサンの到着するの  
を今か今かと待っていた。盲導犬訓練士の多和田さんに連れてこ  
られたジョナサン。名前もクイールに。鳥の羽根という意味であ  
る。多和田さんは、クイールを預けるときに、「この子は、何が  
あっても叱らないでください」と頼みごとをする。長年の経験か  
ら、叱らずに育てることがクイールの盲導犬としての適性を伸ば  
す良い方法だと感じていた。やんちゃぶりを発揮するクイール。  
三都子さんは、ことあるごとに話しかけ、行動は、寝る時以外、  
何をするにも、どこへ行くにも一緒にあった。近所の人・犬・自  
然にふれあう機会をつくり、教えていくのもパピーウォーカーの  
つとめでもある。瞬く間に八ヶ月は過ぎ、二度目の別れがやって  
きた。盲導犬として働き出すと、昔を思い出さないようにパピー  
ウォーカーとは自由に会えない決まりになっている。仁井さん夫  
妻はいつもより長い散歩を終え、クイールを送り出すのであった。  
盲導犬訓練センターでの生活が始まった。多くの盲導犬を育て上  
げ「魔術師」の異名をとる多和田さんによる訓練だ。最初はてこ  
ずったクイールも素直な性格から着実に訓練をこなしていった。  
訓練センターにやってきて一年半。盲導犬と呼ばれるようになる  
日は確実に近づいていた。「犬に牽かれるなら死んだほうがまし  
だ」あまり犬好きとはいえない中途失明の渡辺さんは頑固にそう

言い張っていた。しかし、周囲の人々の強いすすめにも、しぶしぶ  
従うことにした。多和田さんは、渡辺さんとの相性を見て、クイ  
ールを選んだ。訓練センター内で4週間におよぶ共同訓練を終わ  
るころには、渡辺さんの盲導犬に対する認識はまるで違うものにな  
っていた。「盲導犬がこんなにすばらしいパートナーだとは思わな  
かったよ」と思わず漏らすのだった。クイールが渡辺さん夫妻と  
すごして2年がたった頃、渡辺さんは重い腎臓病にかかり入院し  
てしまう。クイールは訓練センターに戻ることにになり、退院し  
たらいつでも働けるように待機することになった。気がつくと3年  
の月日が流れていた。ますます体調が悪化した渡辺さんは「訓練  
センターに行きたい…クイールに会いたい」と奥さんの祺子(よ  
しこ)さんに頼む。再会したふたり。「クー、もう一回いっしょ  
に歩こう」クイールは渡辺さんのいない3年間この瞬間をひたす  
ら待ち続けてきたのであった。ゆっくりと歩き出すふたり。クイ  
ールは、渡辺さんの体調を気遣うように歩き、渡辺さんは、会いた  
かった思いを噛みしめるように歩く。それもわずか30メートル  
で終わってしまう。「…ありがとう…」クイールにそう言うと、  
自分の手でハーネスを外し、いとおしむよう優しくなるのであ  
った。渡辺さんが亡くなる一週間前の出来事だった。パートナーを  
失ったクイールは、デモンストレーション犬として再出発をする  
ことになる。ある日、出番を待つクイールは、体育館の片隅にじ  
と目をやっていた。そこには、あの懐かしい仁井さん夫妻の姿が  
あった。しかし、決して駆け寄るようなことはせず、目で追うこ  
とで懐かしさを表現していた。やがて、仁井夫妻はある決心をす  
る。クイールを引き取らせて欲しいと申し入れたのだった。

《育ての親》のもとに戻るのは極めて異例なケースであった。十  
年ぶりに里帰りしたクイールは、人間の歳でいえば、60歳に  
なっていた。クイールは仁井家のすべてを覚えているようだった。  
しかし、クイールは見るからに弱々しく一緒に過ごす時間はあま  
り残されていないかも知れないと予感させるものがあつた。仁井  
さん夫妻は、かつてのように一日中話しかけ、くる日もくる日も  
回復を願っていた。そのかいあってか少しずつ回復し、お気に入り  
の散歩コースを自分の意志で歩けるようにもなった。もう盲導  
犬ではない。仁井さん夫妻は、自由に歩きたいように歩かせた。  
そんなクイールに異変が起きる。散歩の回数が減り、食欲もめ  
っきり落ちてしまった。検査の結果、極度の貧血…さらに白血病の  
疑いが…。

●お申し込み・お問い合わせは



【飲酒運転撲滅宣言企業】  
(有)有限会社 博映商事

TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220

[HP] <http://hakuei-shoten.jp>

[E-Mail] [info@hakuei-shoten.jp](mailto:info@hakuei-shoten.jp)

